

大燈國師像解説

京都 大徳寺 藏

肖像畫に乏しく従つてその尤品も少い我國にあつて、佛家の肖像畫は異例と云ふべく遺品が多い。中に就て禪宗僧侶の影は最も多きに居る。蓋し付囑又は掛眞等の爲に作製されることが、他宗の場合に比して特殊の因由をなし、かくして製作せられたものが、その一山に於て特に寶重され來つたによることであらう。但しかくの如き佛家肖像は、その畫者が、像主親近の緇徒である場合が多く、之等畫者は時に畫業を専門とするものも及び難い迫眞の技を示すこともあり、又時に籍を緇流に列ねてゐても、専門畫師を以て目すべき人も少からずあつたらしいが、その大部分は技巧の不足によつて畫趣萎微し、生采を發し得ざるに止まることが多いのである。こゝに掲ぐる大燈國師像の如きは夙に尤品として著聞するもの、實にかくの如き肖像畫中にあつて稀に見る技巧整齊、生采潑々たるを得て、峻嚴豪邁なる國師の風貌を寫し出して餘蘊なきものと云ふべきである。專家を以て許さるゝ程に技巧習熟し、加之、此碩徳に對する烈々仰慕の念あるに非ずんば能くこの尤作をなすことは出來ないであらう。禪家の頂相は、その我國に於ける移植發展の徑路からして、當然描法畫風に於ても宋様を傳へ、又はその風を趁ふものが多いのであるが、本像は之等と類を異にし、和様の極めて溫藉な描法に従ひ、肉線には淡朱を用ひ、衣褶も打込の餘り目立たぬ、肥瘦に乏しい墨線を用ひて故らなる強調を避けるなど、この畫者の素養の程を偲ばしむるものがある。

像主大燈國師、諱は妙超、號は宗峰、播州に生れ、初め高峰顯日に謁して落髮受具し、後南浦紹明に嗣法し、大徳寺を開き、花園、後醍醐二帝の尊崇篤かりし高德であつたことは今更云ふまでもなく、その行履法語は大燈國師行狀、

三〇

大燈國師語錄に詳かである。建武四年十二月二十日示寂、世壽五十六、法臘三十四であつた。國師資性峻烈、鉗鎚頗る嚴しく、嗣法の弟子は大徳寺二世徹翁義亨、關山惠玄等十四人に過ぎなかつた。本圖はその上部に施された自筆の法語によつて、圓寂に先づ四年建武元年に上聲書記なる人に與へられたものであることを知り得るが、其人嗣法の列に加はり得なかつた故か、詳傳を知り難い。贊文は絹絹斷爛して辨じ難い點があるが、龍寶山大徳寺誌に載する所と彼此參照して判讀するに次の如くである。但し誌寥々を寥廓に作る。京都社寺名寶鑑得を會と判讀す。原文不明、今誌に従ふ。

末上聲聽、直下攻「機、眼裏怒發、舌」根失理、古今此色「得人惡、青絹畫出」佗是誰、嘆、賓主難「藏分外意、寥々」天邊月一規

建武甲戌臘月下瀚「龍寶山宗峰叟妙超」爲上聲記室書

因に言ふ、本寺には別に後醍醐天皇宸筆と傳ふる贊を有する國師の像を藏するが、本圖に比すれば畫技頗る生硬、合作と稱し難いものである。

友松筆琴棋書畫圖解説

京都 靈洞院 藏

山水描寫のうちに、士君子の四藝を配するは、古來漢畫の好主題の一、本圖また是れに據るも些少も主題に拘泥するところなく、塵外の境に悠々自適の高士を描き、然も添景を主として、琴棋の具は從に配してゐる。

乃ち左隻にあつては、松樹の下、書見に倦みて、琴を執り彈じ終つて、渺たる巒峰に對語する高士の脱俗の風姿と、その後方の低い書卓に倚りつゝ、腕を兩袖深く藏して、假睡する僕童の邪念のない姿には、自ら清爽の氣が漾うてゐる。かくて遠景の山容も木立も淡墨描になり、松と岩とは濃淡の墨描に、こゝろよい諧調が示されてゐる。高士の頭布と帶に褐色、琴も亦同色、僕童の襟と袖口とに綠青、帶に朱、書冊と卓の縁に群青、而て卓上に淡朱が施されてゐる。